

を具備しないのである。

○日本畫のすべつこいのばかり見なれた人にわが繪を見せるとわけもなく批難する。すべつこい線てなけりやはり承知が出来ないと見える。遠近の苦心や光線の經營には一寸も心は留めないで影のマッスの美を勿體ない兒戯だなんてひやかしていつた。

○その人が去つてやつと胸をなで下して、あの人は可愛相だなと思つた。するとどこかの角の方で勝利の鬨聲が淡い調子に振亂した。

○人は平凡だと氣にも留めないで而も我には大なる意味を有してゐる場合が嘗て幾度も有り得た。吾は常に平凡をあさつて平凡の中に平凡を求めてゐるのである。そして求め得たる平凡をわが趣味と思つてゐる。

○一日に二度づつ歩む往還の左右の風物は皆是平凡である。朝日を受ける平凡、夕日を浴びる平凡、さては雨の日風の日の平凡。かかる平凡の變化は常にわが視覺を通じてわが腦裡に一の波紋を生ぜしめずには置かない。か様な波紋を受取り得た度毎に人知らぬこの幸福を雀躍せずには居られない。

審査員に望む

大阪 大隅 月 峰

十一月五日當地お伽俱樂部主催にかゝる子供寫生會が京坂電軌沿線に開かれ越えて十四日よりその展覽會が香里園で開催された。作品は總て七百餘點にて殆んど水彩畫が全部を占めて居

た。元より小さき子供(當市全小學校の尋常五年より高等二年迄の撰拔生)の作であるからには駄作許りの陳列と云つてと餘り差聞えないであらう。然し僕は斯る會の物質的の大阪に開かれたのは洋畫普及上に非常に利益があると思つて心より嬉しかつた。場中で佳と思ひしは

八幡社前の女、平野の下瞰、八幡神社、淀川沿ひ、寺門、水邊の林、神の森、伏見の家、其他二三

それについて僕はその審査に少し公平を欠きはしなかつたかと思はれるのである。僕は等級の如何なる順序かは知らないけれども假に特等を首席とするならば僕は八幡神社の畫に特等の賞を附したる理由を解するに苦しむのである。彼の燈籠の輪廓、石崖に寫る影の色。ア、何處に特等の資格があらう。僕はむしろ優秀の級の八幡社前の女の畫を特等にしたかつた彼の簡單にして要を得たる一寸得難たいスケッチ(子供として)にてよくその感興を捕へたるは感ずる次第である。僕はかゝる會に於ては充分眞面目に審査せられたきを願ふものである。少年は僅かの事に慢し易き者である然して最も誘惑され易き者である。審査員諸氏宜敷に留意せられん事を望む

終りに此會の永續を希ふて止まず (十一月廿三日)

素人の繪畫鑑賞と云ふ事

大阪 歳 湯 木

私の友人には『氣分』と云ふ事を非常に大切がる人があり、普

遍的の感情から一步脱却した所に自分の觀念を置いて超然たる人があり、『官能』と云ふ事を尊重して居るものもある。

要するに個人としての理論より割愛した趣味と云ふ事はその人の天分如何に係らず、或點までは向上進歩發展されてゆくもので遅鈍と敏恬との差異こそあるだけであつて見れば文明の人間は大低同程度の腦力と努力とをもつたものに過ぎないと思はれる。社會政策の根據より推論して社會は總ての事秩序よりなるものとも受けとれるし、無闇に偉人や傑物を出さないが正比例して聖人タイプの君子が餘計世間に出現して共同的生活の理想社會を形勢するものと考へらる。

以上は普通人の感情及び實行生活の實現とも見るべき英斷であつて、茲に此等、普通人の觀照の態度が直接に間接に藝術となつて、その智能の展開は、人生の見解の如何により、自己そのものの胸裡に輝く抱負の如何により、藝術は實社會の商工農の發達により社會の改良とし文明の開拓につれ超然たる段梯にあつて然も此等と密接なる關係は言を待たずである。

此の理論を究めてゆけば物質界の理論ともならう、學科の輿論ともならうが、單に此の場合には斯くの如きものなりとして、實行生活の俗惡的なものより藝術生活の情愛的なる分子を加味された極普遍的な人間の一團として、之を命名して曰く、素人の繪畫鑑賞と云ふ事を斯くの如き一般的の立脚として、其根源より行爲の標準を明白にすることは一面不可能なるも、眞理も一面には含有されて居ると信じられる。

繪畫そのものには福食文藝家として立派な専門的な所信のある人もあらう、無趣味な職業柄であり乍ら頗る情慾的な鋭い感傷を持つた熱狂詩人も無いとは限られない。

之等の水平線外の人々は例外として、水平線に凝集し來る總てのものども、普通人としての多少の凸凹こそあれ、畑の如き押し並べて終へば平面な耕地となるが如き見界よりして、繪畫の鑑賞をすると云ふ事は、各個人が智識の程度は無差別なれども、思想と行爲の標準は時代により時代の人により、時により場合により、素人の繪畫鑑賞は要求と云ふ事、自己生活の慰藉たらずとも境遇上から、又は家庭的からとか、繪畫鑑賞に趣くのかかる推定からせば、繪畫鑑賞は各個人個別の色調により個別の情緒より、自己の才分により自己の製作品より、又は學理上よりして繪畫鑑賞するにとどまるのであつて、見れば、私等は常に斯道に特別の野心もなく、榮達もなく、普通世間の挨拶對話に於ける平易にして然も社交上手になりたがる、賢い方法を講究するのが素人の繪畫鑑賞は眞實であると思はれる。

要するに、之を以て汎く繪畫を愛說せよと論及するのでなく境遇上、場合によつて素人の素人臭いと専門家より批評を受けらるみぢめさよりも素人は素人の見解と態度と所信とさへあれば充分でないか。

私等が茲で『素人』とは如上の意味で、専門家に對する素人とは問題外である。であるからして、畫をものする人もあるだらう、ただ繪畫が好きであるとする人もあらう、様々であつて、

絶対に畫筆を持つことのない人もある。

かかる素人の立脚地より更に言葉を足せば、あの可愛い少年や少女の頬ぺたをふるらかにしてポツペンを吹く態度や動作に見出たる懐かしい心持をもつて、幼な時代の筆かな年頃の氣になつた『愛』の時代の生活をつづけたいものだ、假令行爲はさなくとも思想の古朽せんとする刹那の氣分は斯くありたいものだ更に、あのマンドリンの音調の如く。神經の焦々とする黄なる響を捉へたいものだ。

論じつめると、セニチメタルなセンスにより多く捉はれた觀念を持つて居るのもよからうと思はる、ローマンチックやクラシックには全然絶對的に拘束されたくない。

みづゑ八十二號に横濱のSKKと云へる人が素人の繪畫鑑賞に就て狭義な見地と、美術そのものに捧身的になる人々の將來論とも見るべき事を定規的に述べられた所信であつた。甚だ困難したから私の所信を述べたまでである。學校がお休みになつたら纏つた繪畫鑑賞論を具體的に申上げたい、素人と云ふ事の社會上の程度問題をも語りたい、併せて日本社會の學究的に參考になる實例を擧げて生活状態等を論じたい、猶、日本風景と旅の問題を一夕話としたい、之等は特に水彩畫線上の感興問題としたいことを言つて置く

景福品の春

(前承)

在京城 健 堂 生

歩を左側の小門に轉じ、入れれば一大樓あり、之れ則ち慶會樓

にして、京有數の遺物なり、石橋を渡り樓内に入れば、周圍池水右方小丘を作り、二三樹あり、此樓二層にして五十有餘、長さ凡そ二間周圍八尺の大石柱、予想ふ斯る建物を見ざる事を、天井好く彩色を施し美亦言ずもがな、然れども樓上を見るを得ざりき、池中蓮の枯葉水中に垂れ小魚春の暖きに群り戯るを見る、附近迄芝生然して挑樹あれど開花期少し早くして、背後の松石垣を抜きて黄葉を彩り幹赤し、予一枚の寫生をなし樓を辭す、予此の樓を見る度深く想へを乙未の變に走らす、住時國王は難を露公使館に逃れたれど、時の皇妃閔妃は此樓に於て官女と共に戯れ中捕はれ、白丹山下綠松の邊音無く聲無き處に於て殺されたるを、予樓を出て崩垣の側道を辿り、後方廣地に出づ、彼所松林あり、空地芝雜草茂生す、所々崩破の小舎を見る、閔妃の殺されし處に到る、一小舎あり松林密生し日暗きを覺ゆ、予彼半島の女傑を想ふて哀愁の念起らざるを得ざりき、小舎を出て右道せば醉香亭あり、架橋池中樓あり蓮多くして夏期の満開期を思はしむ、

歸路道變へて左側を見しに、早や十數棟の家屋其の蔭ぐなく、今時花園と化す、昨春の頃は好く家屋存し舊官女の舎内に縫取等を行ひ、生計を保ちたれど、今は皆彼等も解散して唯愁寞春草生緑にもあらざる如く、白冉山の綠松は永へに茂れど此宮亦永へあるや否 (完)